

オギュスタン・ベルク風土学の生成と構造

Formation and Structure of Augustin Berque's Mesology

犬塚 悠*

Yu Inutsuka

はじめに

環境問題は今日の人類が抱える複合的課題である。この課題を問うにあたり必要であると考えられるのが、人間存在と環境との根源的關係にさかのぼって「環境問題とは何か」を考察し、そこから具体的対処さらには次代の人間社会の姿を構想していくことである。

人間と環境との関係を扱う学問に地理学がある。中でもフランスの地理学はポール・ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュ（1845-1918、以下ヴィダルと記す）以降、近代ドイツ地理学における環境決定論的な分析を批判し、環境との相互作用における人間の主体性を重視する環境可能論の傾向を持っている。

本稿では、そのフランス地理学に属しながら日本というフィールドを通じて独自の理論を打ち立てたオギュスタン・ベルク（1942-）の「風土学」に着目する。ベルクはフランスの日本研究者として高く評価される一方、その風土学の概念的枠組みへの理解は相対的に低いままである。本稿では、ベルクの研究が一貫して人間と環境との関係を問う「地理学」の探求であったことに着目し、ベルクの方法論的思索の

変遷を追う。

ベルクは後に「風土学 *mésologie*」¹と呼ぶ自身の地理学が占める位置を、「自然科学（特に生態学）における実証主義な〔ママ〕アプローチと、社会が環境を解釈する方法を理解することに努める解釈学的なアプローチとの間の認識論的に中間的（*médiane*）位置」²としている。本稿ではこの風土学の形成にいたる重要な契機として、日本の哲学者である和辻哲郎（1889-1960）、アメリカの生態心理学者ジェームズ・J・ギブソン（1904-1979）、フランスの人類学者アンドレ・ルロワ＝ゲーラン（1911-1986）らの研究からベルクが受けた影響に着目する。

以下の章では、まず1970年代のフランス地理学の状況を確認した上で、ベルクが非西洋である日本というフィールドにおいて研究を始め、和辻、ギブソン、ルロワ＝ゲーランらにインスピレーションを受けつつ彼の理論枠組みを確立していった過程を明らかにする。その中でベルク地理学たる風土学の枠組みのうちに、今日の都市・地球環境問題に対する基礎的な考察

*東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：風土性、通態性、環境、風土、風景

が備わっていることに言及したい。

1. 初期のベルク：フランス地理学における方法論的展開と解釈学的手法

1.1 ベルクを取り巻く当時のフランス地理学の状況

ベルクの研究を位置づけるにあたって、彼が研究を始めた当時のフランス地理学の状況を知ることが有用だろう。ベルクが彼の研究を開始した1970年代、フランスの地理学は方法論の模索の時期にあった。アメリカではイーサー・トゥアン（1930-）らによって現象学的地理学が生まれたのは1970年代であるが、フランスでは早く1952年のエリック・ダルデル（1899-1967）にその萌芽が見られる³。ハイデガー、バシュラール、レヴィナスらから影響を受けたダルデルは、『人間と大地：地理的実在の本質』*L'homme et la terre. Nature de la réalité géographique*（1952）において、人間存在の本質としての「地理性*géographicit *」という概

念を提唱し、人間存在は土地から切り離して存在しえないこと、両者の相互作用によって物理的・現象的な現実が形成されることを主張した⁴。それまで自らを自然科学に位置付けていたフランス地理学は1960年代から転換を始め、1980年代には社会科学として人間の生きる現実世界を研究するようになり、1990年代に至ってこの転換を完成させている⁵。この現象学的地理学における重要なテーマのひとつが風景論であった。都市化・画一化という時代的現象に対応するものとして生まれた風景の問題に対しては、1980年代には哲学者からも多くの著作が出されている⁶。

1.2 解釈学の方法、地理学と主体の問題

ベルクはその研究のはじまりの時期に非西洋である日本を対象として、地理学に解釈学的手法を取り入れるという方法論的挑戦を図っていた。博士論文『北海道の大地：文化地理学の研究』*Les grandes terres de Hokkaid .  tude de g ographie culturelle*（後に一部を『稲と流水：北海道の開拓と文化的変容』*La riziti re et la banquise. Colonisation et changement culturel   Hokkaid *（1980、未邦訳）として出版）においてベルクは、流水と稲作が同時に見られるという西洋の常識からしてみれば不可解な北海道における農業のありようを、自然環

境と社会制度、人間精神の相互作用の結果として見た。ベルクはその研究の第一歩から、当時の地理学の実証主義批判的傾向にも沿って、人間が生きる空間の複合的な現実を捉えようとしていたのである。

また、アナル学派の中心的人物の一人フェルナン・ブローデル（1902-1985）が編纂を行ったシリーズにおいて、ベルクは『日本：空間の管理と社会変動』*Le Japon. Gestion de l'espace et changement social*（1976、未邦訳）を執筆した。この著作においては「物理的な面や土木の面、社会学的あるいは政治的な

面が色濃く、精神的な面は書かれていない」⁷と本人が後に述べるものの、従来の歴史学的手法を批判して学際的な研究を試みたアナル学派とベルクが接点をもっていたことは注目に値するだろう。

続く『空間の日本文化』*Vivre l'espace au Japon* (1982=1985)においてベルクは、空間を「精神的組織化organisation mentale」・「技術的組織化organisation technique」・「社会的組織化organisation sociale」という三つの組織化から構成されたものとする理論枠組みを掲げている。これは、アンリ・ルフェーブ

ル (1901-1991) の『空間の生産』*La production de l'espace* (1974)における「精神的空間espace mental」・「物理的空間espace physique」・「社会的空間espace social」に変更を加えて援用したものであった⁸。ベルクは中でも特に精神的組織化を中心的に扱い、日本における主体性の表現が、いかに自然環境・社会制度と相関関係にあるかを問題とした。ヴィダール以降のフランス地理学の環境可能論の伝統と方法論的挑戦の企図が、ベルク独自の展開をはじめている。

2. 風土milieu、風土性の発見：和辻解釈による存在論的基盤の獲得

複合的空間の捉え方に革新が試みられたのは1986年の『風土の日本』においてである。本書でベルクは、人間存在の主体性は本質的に環境との相互作用において立ち現れるという視点から「風土学」を提唱した。この風土学は、和辻の『風土』(1935)に基づいている。特に

ベルクが着目するのは『風土』の序言における「人間存在の構造契機としての風土性」⁹にみられる「風土性」の定義である。ベルクはこの一文をおよそ四半世紀かけて内省し¹⁰、彼独自の「風土milieu」および「風土性médiance」の概念を生み出している。

2.1 和辻の『風土』

和辻は『風土』の冒頭において、「風土」と「自然環境」との混同を拒否している。後者は自然科学の対象となるものであり、また「常識的な立場」すなわち「すでに具体的な風土の現象から人間存在あるいは歴史の契機を洗い去り、それを単なる自然環境として観照する立場」から、人間と自然環境との関係について語る際に想定されているものである¹¹。

一方「具体的な風土の現象」とは何か。和辻が挙げる「風土の現象」の例は、「寒さ」であ

る¹²。「寒さ」とは、大気の性質でもなく、人間主体の性質でもない。主体が大気に関わることによって初めて生じる現象である。和辻はこれを、ハイデガーの「脱自Ex-ist」を踏まえて、「外に出ているex-sistere」と表現する¹³。その現象を通して初めて、人間主体は自身の存在の様態と環境の様態を知る。この同時的な発見を通じ、個人の活動も、ある社会がもつ生活様式自体も、その風土にかなったもの（この場合は、寒さを防ぐための形）をとるよ

うになる。よって「風土」は、個人かつ社会の「自己了解の仕方」なのである。

独自の風土学を構想した和辻の思想の背景にハイデガーら西洋の知が土台としてある一方で、和辻の独自の思想形成にはあくまでも日本語において思考したということが大きいと指摘される¹⁴。その影響は、語義の解釈学という方法論の範囲内に留まらず、言語構造というレベルにも見られる。例えば「寒さ」という「風土の現象」の事例において、日本語の「寒い」で表現されているのは、西欧語の構造においては表現されえない主格未分の状態である（“It is cold.” においては、「寒さ」は客体である大気の状態として表現される）¹⁵。言語間の差異は、はじめベルクにとっても壁として現れた。

2.2 フランス地理学への和辻「風土」・「風土性」の導入

和辻は、精神的組織化・技術的組織化・社会的組織化によって構成される複合的な空間を想定していたベルクに、人間存在の構造契機としての「風土性」の次元からそれを理解する方法を与えた。そして『風土』第一章における和辻風土学の理論は、翻訳過程を通じて、ベルク風土学として再解釈されたのである。まず、和辻の「風土学」はすでに英語訳において用いられていたclimatologyではなく、mésologieと訳された。ベルクがmésologieという用語を初めて使ったのは、1986年に出版された『風土の日本：自然と文化の通態』*Le sauvage et l'artifice. Les Japonais devant la nature*（1986=1992）の執筆の時であるという¹⁷。彼はその語を、『19世紀ラルース世界大辞典』*Grand Larousse du XIXe siècle*の中に見つけ

ベルクは、1969年に彼が初めて『風土』を読んだとき、彼にとってそれは読むに堪えないものであった、と後に告白している。「民族の心理を物理的な風土の特質から引き出す陳腐な決定論」としてしか見えなかった理由を、ベルクはそのとき手にした本が英語の翻訳版だったためであろうと述べている¹⁶。彼はその後、『風土』を日本語であらためて読み直す幾年もの思索を通じて、和辻が提示した「風土」・「風土性」に地理学的また存在論的な本質を見出していくことになる。日本語で思考する和辻の思想が、日本文化を通じて地理学的探求を行うベルクの研究の中で再解釈され、フランス地理学の文脈の中でも大きく展開されることとなったのである。

ている¹⁸。パリ人類学派の創設者の一人であったルイ＝アドルフ・ベルティヨン（1821-1883）が発明したものと記されていたmésologieは、「生体と生体の生きる環境との相互作用の研究」と定義され、物理的要因ばかりではなく、社会関係・教育・法律・風俗習慣などの文化的要因も考察対象とするものとされていた¹⁹。この総合的なとらえ方は、ベルクの「風土学」の射程と重なるものであった²⁰。次に、和辻の「風土」は従来の訳語であるclimateではなくmilieuと訳された。坂部恵や木岡伸夫が指摘するように、ここにベルクの根本的な姿勢が示されている²¹。climateは、人間主体からは区別された自然科学的・客観的な環境という意味に取られやすい。milieuは、ヴィグダルが物理的な環境environnementとは異なるものとして用いた

基本概念のひとつであり、物理的環境のみではなく文化的環境も含む環境を指すフランス地理学の用語である²²。最後に、和辻への評価の鍵となった「風土性」も翻訳がなされる必要があったが、ベルクはこれに対応するフランス語を見つめることができず、新しい語の創造が試みられた。それが、milieuにあたるラテン語の語源にambiance（環境、雰囲気）とmédiance（中音）の影響を加えて作られたmédianceである²³。風土の性質・意味として定義されるこの語の理論的探求と、それをを用いた個別具体的事象の分析が、ベルクのその後の仕事の中心を占めるものとなる。

ベルクは和辻の風土にヴィダルのmilieuをあてたが、一方で和辻自身は『風土』に添えた追記（1948）において、本文執筆当時の自分は「フランスの人文地理学における飛躍的な発展」に暗かったことを告白し、ヴィダルやリュシアン・フェーブ（1878-1956）の書名を挙げながら「もし当時自分がそれらの書に親しむことができたのであれば、風土学の歴史的考察はよほど違ったものになったろうと思われ

る」と述べている²⁴。以後に出版された『倫理学』（1937-49）においても、和辻はヴィダルの仕事を「人間存在の風土的構造を捉えるという仕事に最も近づいているといってよい」²⁵と評価している。一方その後のヴィダル派の流れの上で、ベルクが和辻の解釈学的現象学を再評価したことには次のような意味がある。ヴィダル派が取った手法は、同様の自然環境においても人間が異なった文化を生み出しうるということを検証するための、あくまでも実証科学的なものであった。ベルクは、ヴィダル派が着目したのは事実のみであり本質ではなかったと述べる²⁶。それに対し和辻が提示した「風土」は、「人間存在の構造契機としての風土性」という定義に表れるように実存に関わるものであったのだ。ベルクは、地理学が主要対象たる風土milieuを記述するための概念のコーパスを作り上げなかったことを批判しながらも、環境可能論の伝統をもつフランス地理学は元来風土milieuの研究に卓越していたものとみなして、そこに風土学を発展させる可能性を訴えた²⁷。

3. 通態性の誕生：ギブソン解釈による風土性の客体化

3.1 和辻『風土』の問題

ただし、ベルクが和辻の『風土』を受容するにあたり一つの問題があった。既に多く批判されてきたように、『風土』第2章から第4章にかけての個別事例研究（モンスーン・沙漠・牧場の3類型）には独断的・環境決定論的側面が見受けられる²⁸。ベルクも、『風土』の理論部の有効性に比べ、事例への適用において「他者

の主体性の代わりに自分の主観性を据えただけ」になってしまった和辻の錯誤を批判している²⁹。事実、和辻自身もその危険性を理解していた。「詩人的想像の産物」としてカントに批判されたヘルダーの風土学Klimatologieの例を挙げながら、彼はその懸念を語っている³⁰。それでも和辻は、「風土に関する限り、直観はは

なはだ大切」³¹であるとして直観という方法論に固執したのである。この和辻の方法論を、積極的に捉える意見もある³²。しかし地理学者のベルクにとって、風土milieuとは現象学的な解

釈学に関係すると同時に実証主義に適合する客観的「環境」の性格をもつべきものであり、風土性médianceの分析のためにはそれを客体化することが必要であった³³。

3.2 ギブソンのアフォーダンス概念による「通態性」への導き

和辻の提起した問題をどのように肯定的に取り上げることが出来るかというこの課題に取り組むにあたって参照されたのが、ギブソンのアフォーダンス概念であった。ギブソンの『生態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る』*The Ecological Approach to Visual Perception* (1979=1986)は、風土学的な見解をまだ漠然と予感するばかりであった頃のベルクに、最も大きなヒントを与えた書物であると後に語られている。この書のおかげでベルクは「『風土』を新しい眼で再読でき」³⁴、通態性の概念の発想に至ったのである³⁵。「アフォーダンス」とは、空気の特徴が陸生動物の呼吸や運動、見ること、振動やにおいを感知することを可能にしているように、「自然が提供するもの、またこれらの可能性ないし機会」³⁶のことである。視覚などのすべての感覚は「環境と自己の両者に関する情報を獲得する」³⁷とみなすギブソンの生態学的実在論は、和辻の風土の現象理解との相同を示しつつ実証的側面をもつために、ベルクにとって和辻の思想を積極的に取り入れるための方法論的基盤に対する保証を与えた。ギブソンを通じて風土milieuは「現象に過ぎないものでもなく、まともに物理的な実在性を備えている」³⁸ものとして考察の基盤を得ることができたのである。

ギブソンの「アフォーダンス」は『風土の日

本』以降のベルクの著作においてしばしば登場し、通態性という概念の生態学的基盤を支える役割をもっている³⁹。「通態性trajectivité」は、和辻の風土学にはない、ベルクによる造語である。1986年に風土学が提唱された際に、通態性は「『風土』(milieux)の生まれ出る実践の次元。二つ以上の指向系の動的組み合わせ。主観的／客観的、自然的／文化的、集団的／個別的…。メタファと因果関係の、投影と連鎖の、偶発性と規定の組み合わせ。或いは「空間構成的」(chorétique)なもの「場所的」(topique)なものとの組み合わせ、これは物質的な移動をも含み得る」⁴⁰と定義されている。また通態化trajectionは「風土性をうみだす、主観的なものと客観的なもの、物理的なものと現象的なもの、生態学的なもの象徴的なものとの風土＝歴史的な結合過程」⁴¹と定義されるようになる。

ベルクがこの語を考えついたのは、ジルベール・デュラン(1921-2012)の「人類学的行程trajet anthropologique」という表現からであった。それは、「想像のレベルで行われる、同化しようとする主観的欲動と片や宇宙的・社会的環境からの客観的通告との間の絶え間ない交換」として定義されていた⁴²。ベルクが再定義を必要としたのは、デュランが「想像のレベルで」と定義したように、生態学的・物理的側

面をほとんど考慮していなかったためである⁴³。それは和辻においても同様である。和辻の解釈学的存在論では、バルクが風土milieuにおいて想定するこの「物理的かつ現象的」な現実の説明する必要がない。しかし、「自然的所与としての風土の物理的側面と、「その中で」風土として認識・受容して表象する人間の主体的側面を、trajetという形態で捉える研究者の眼差し」⁴⁴を、バルクは選択したのである。通態性は、主観と客観、個人と集団、文化と自然、時間と空間との対立を無効にするものである。なぜなら何かを〈…として〉見る人間の現実には、主観・個人・文化・時間の主体性に対して開かれ、しかしまた客観・集団・自然・空間に規定されてもいるからだ。そして通態化のプロセスは、ジャン・ピアジェ（1896-1980）が指摘したような個人の成長過程における相互作用に留まらず、風土が形成されるに至る人間と自然の歴史的レベルに渡って行われるものである⁴⁵。

バルクはこの通態性の概念を用いて、当時のフランス地理学の主要な研究対象であった風景

を分析している⁴⁶。例えば、古人類学上の発見（ルーシーなど）によって、幾人かの著作家は東アフリカのサヴァンナを人類の原風景として描くようになった。その後次第に、人々はサヴァンナを以前と同じものとしては見なくなり、そこに自身のルーツを感じ取るようになってゆく。そのことが人々の行動を決定し、また環境自体も変えるようになる（観光施設の整備など）。それがまた、人々が見る風景を形成してゆくのである。風景は、物質的なものにも現象的なものにも還元できないものである⁴⁷。一方日本を対象とした分析では、社会がその空間を「景化paysagère」するメカニズムが極度に体系化されており、数多くの「名所」が「歌枕」となっていることが取り上げられる。時を経るにつれてしばしばそれらの場所はイメージを喚起する機能しかもたなくなるが、それらの場所はなくなることはなく、芭蕉のように尋ねることもできるのである⁴⁸。地理学の問題であった風景は「感覚でとらえうる風土性の現れ」⁴⁹として定義され、その後もバルクの重要な研究対象となる。

4. 風土ecoumene、風土性の再解釈：ルロワ＝グーラン解釈による人類学的拡大

4.1 都市・地球環境の問題、風土écoumène

自然環境破壊の問題は『風土の日本』においても扱われていたが、1990年代以降バルクの研究が進むにつれそれは風土学の課題と必然的な結びつきを強くしてゆく。そこには、環境問題が増大した1970年代以降地理学は自然と人間との関係の意味への問いを提起すべきであったにも関わらず、してこなかったことに対する

バルクの危機感がある⁵⁰。バルクはそれが四半世紀に渡って地理学の評価を芳しくないものにしており、その改善のために「風土性の視点le point de vue de la médiance」⁵¹の更なる精緻化を試みた。

また当時の状況として、1970年代から1990年代にかけて存在感を大きくしたエコロジー思

想がある。「自然の権利」を主張する『動物の解放』*Animal Liberation* (1975) のピーター・シンガー (1946-) や、『自然契約』*Le contrat naturel* (1990) のミシェル・セール (1930-) らの環境倫理は、人間と他の動物を基本的に同じものとして扱う。彼らの思想は、地理決定論を拒否し人間の主体性を重んじるベルクに人間と動物との違いについて意識的にさせた⁵²。

この課題に対し、まずécoumèneという概念の反省がなされた。écoumèneは、1986年の『風土の日本』においては従来地理学における定義と同じく「人間の居住域」⁵³として位置づけられていた。人間の居住域が地球規模に広がった今日地理学者にとって実質的な意味がなくなってしまったこの語に対し、ベルクはやがて地球の問題を人類の問題として扱うという積極的意義を与えるようになる。1993年の『都市の日本：所作から共同体へ』*Du geste à la cité. Formes urbaines et lien social au Japon* (1993=1996) の最終章で、écoumèneは「人類が住んでいる「かぎりでの」地球」すなわち「居住可能性から見た地球」として説明された。そして『地球と存在の哲学：環境倫理を越えて』*Être humains sur la Terre. Principes d'éthique de l'écoumène* (1996=1996)⁵⁴にお

いてそれは、「同時に地球であり人類」⁵⁵であるという意味で「風土」という訳語を得る。その後écoumèneは、主著『風土学序説：文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に』*Écoumène. Introduction à l'étude des milieux humains* (2000=2002) の原題にもなり、ベルク思想の象徴的概念となる。

ここで風土は、milieuに加えécoumèneという第二の訳語を得るようになったのである（邦訳では二つの風土を訳し分けるように工夫されている）。この概念の拡張については、他の動物とは区別される人間の性質としての「生態象徴性écosymbolicité」というもうひとつの新たな概念に着目したい。1996年にベルクは、人間を生態学的次元と象徴的次元の両者に同時に属するものとして特徴づけている⁵⁶。その視点からすれば、エコロジー思想が暗黙の内に前提としているのは生態学的な次元への一元的な還元であり、そこには食物連鎖や動物行動学的規定がある一方、人間の主体的意志とその責任、つまり倫理の根拠が存在しない⁵⁷。倫理は、風土écoumèneの次元にしか存在しないのである。風土écoumèneにおいては、全てが人間存在に関わっている。それゆえにこそ価値が浸透した各々の場所は、そこに関わる人々の人格尊重の側面から倫理的保護に値するのである⁵⁸。

4.2 ルロワ＝グーラン「外化」・「社会身体」による風土性の再解釈

風土écoumèneの風土性を再解釈する過程で、「実証科学に通じるヒント」⁵⁹が得られたのはルロワ＝グーランの人類学からであった。ルロワ＝グーランは『身ぶりと言葉』*Le geste et la parole* (1964-65=1973) において、動物

的進化の結果の直立位が人間の道具の使用と言語活動に本質的に結びついていることを論証した。人類はその結果、動物的な進化から解放された形で発展を遂げたとされる。「社会がしだいに種形成の流れにとってかわるまったく新し

い組織への道」⁶⁰を歩む人類史を示しながら、ルロワ＝ゲーランは、人間には動物的な身体とは別に「社会身体corps social」があると述べる⁶¹。この人間種が固有に持つ特徴を彼は、道具（後に機械）・言語活動による身体能力・記憶の「外化〔客観化、物質化、具体化〕extériorisation」⁶²と呼んだ。

この「外化」は、和辻の「外に出る」という語や、和辻が基盤としたハイデガーの「脱自存在Ausser-sich-sein」、そして「実存するexisterre」の語源「外にex」「立つsistere」の語がもたらすイメージの客体化へとベルクを導いた⁶³。ベルクは和辻らによるイメージを重視しながらも、「たんなるイメージよりも強固な土台の上で、現代的な風土性の理論を新たに確立することが必要なのである。その土台を与えたのが、ルロワ＝ゲーランの人類学であった」⁶⁴と述べている。ルロワ＝ゲーランが示した人間誕生のプロセスを、ベルクは生物圏から風土écoumèneが誕生するプロセスと同時に発生したものとする⁶⁵。ただしベルクは、技術的次元・象徴的次元という二つの次元で構成される「社会身体」の代わりに、風土の生態学的な次元を強調する意味で「風物身体corps médial」という語を置いた⁶⁶。これにより「人間存在の構造契機としての風土性」は、動物身体corps animalと風物身体を併せ持つ人間存在という理解から捉え直されることとなった⁶⁷。

4.3 風土学の現在とその意義、近年の発展：通態性の哲学的・生物学的探求

風土écoumèneの考察とはすなわち人類とその環境との相互関係を問うものであり、風土学は実存的な次元と生態学的次元・人類学的次元

また「社会身体」と「風物身体」の間には、象徴的作用に対する二人の解釈の違いがある。ルロワ＝ゲーランが示した技術と象徴は、両者とも人間の動物身体を「外化」するものであった。ベルクはこれに対し、技術は動物身体を「外化」するものであるが、象徴はむしろ「内化」作用をもたらすと指摘する⁶⁸。ここには和辻・ギブソンの影響の下、現実を通態的なものとして見るベルクの視点がある。ベルクはこの通態化trajectionのプロセスを、技術的な投射projectionと象徴的な内射introjectionという二重のプロセスとして表現する⁶⁹。例えば火星におけるロボットは、人間身体の外化としての技術である。一方、人は言語を用いてこの火星とロボットについて思い浮かべ、話すことができる。この言語の象徴機能によって、火星とロボットは口やニューロンという物質性をもって人の身体の内に入り、またその人の意識を構成する一部となっているのである⁷⁰。

このようにして拡大を遂げた風土学であるが、この段階に至っても「風土学たるべき地理学」というベルクの動機は変わっていない。風土はmilieuであるとともにécoumèneとして拡張されたが、主著となる『風土学序説』にて彼は「関心となる極は変動しているものの、地理学という学はそもそも、風土écoumèneを研究する学である」⁷¹と述べている。

を融合するもの、また新たな環境倫理を導出するものである。ベルクの業績は複数分野の知を並べただけの単なる陳列的横断研究ではなく、

翻訳と再解釈を通した一つの体系への統合である。

風土学的知見がもたらし得るものを、別の視点から捉え直してみたい。例えば、哲学者ベルナル・スティグレル（1952-）はルロワ＝グーランに対して「外化の逆説」⁷²という批判を行っている。人間は技術によって人間となるにもかかわらず技術は人間の内部からの外化からしか生まれえないという逆説、「内部と外部の対立」⁷³である。ルソーの「自然人」（文明化されていない人間存在）に見出したアポリアにルロワ＝グーラン自身もはまってしまった、とスティグレルは指摘するのだ。一方風土学においてこのアポリアは、まさに風土性・通態性に着目することによって解決されると考えられるだろう。風土の現象は「外に出た」人間の「自己了解の仕方」であった⁷⁴。「寒さ」はそれを認識する人間の自己了解と環境への働きかけを共に生み出す。スティグレルのいう「それら（内部と外部）を同時に発明する運動、あたかも人間とよばれるものの技術—論理の産婆術があるかのように、互いの内に互いを発明し合う運動」⁷⁵とは、投射と内射という二重のプロセスである通態化のことであるといえるのではないだろうか。

また、環境問題に対する新たな基礎論として風土学を位置づける意味もここから導かれるだろう。環境を空虚な物理的対象のように扱うことは、同時に人々の人格を脅かすことに他なら

ない。近代的な倫理のモデルに反し、一つの人格の所属する範囲は個人の身体に留まらないためである⁷⁶。そしてこの範囲は、近年のメディア技術の発達によって地球全体へと拡大されている。南極大陸のアデリー海岸に設置が計画される飛行場の排気ガスが、物質として日本に住む私たちの身体へと辿り付くことはほとんどないだろう。しかしテレビなどのメディア技術によってその海岸は私たちの意識のうちに存在するだけでなく、物理的にも私たちの現実に繰り返し存在することになるのである⁷⁷。ギブソン、ルロワ＝グーランの解釈を通じて提示された風土écoumèneにおける通態性は、グローバル化する現代社会において和辻の風土milieuがもつ意義の再考を絶えず促す。人間と社会・地球の現実を理解するための基礎的知識を与える風土学は、倫理、都市・社会デザインのラディカルな問い直しの基盤となるものであると考えられる。

今日、フランス地理学において一定の評価を得ているバルクの風土学は、今も更なる精緻化の段階にある⁷⁸。その挑戦は一方に、ユクスキュル、今西錦司、また近年のエピジェネティクス研究などを参照しながら、通態性を生物一般の世界から再解釈する方向にある。また一方、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、西田幾多郎、山内得立などを参照しながら、通態性の構造の哲学的探求をさらに推し進めることも試みられている⁷⁹。

おわりに

ベルクの仕事は、1970年代のフランス地理学における方法論的探求の流れにおいて、日本というフィールドで解釈学的方法を応用することによって始まった。和辻の「風土性」はベルクが持っていた複合的空間理解に存在論的基盤を与え、またギブソンの「アフォーダンス」は生態学的基盤を与えることでベルク風土学生成の契機となった。1990年代のエコロジー思想の勃興に対抗するように、ベルクは人類の風土 *écoumène* の問題に取り組んだ。ルロワ＝グーランの人類学は、ベルクの生態象徴性に人類学的基盤を与え、更に技術性という視点を与えた。ベルクにおける象徴の内化作用の解釈は以上三者の知見を統合するものであり、風土性の次元の解明へと貢献すると共に今日の環境問題の本質を人間存在の基礎的理解から解明するものである。

本稿ではベルク風土学の生成を辿りながらその概念構造を明らかにすることを目的とし、風土学の概念を用いてベルクが行った具体的事象

の分析にはほとんど触れていない。また、風土学概念の形成過程における重要な契機として和辻、ギブソン、ルロワ＝グーランに着目したが、その哲学的概念形成の上では重要なハイデガーの存在論・技術論や西田哲学、山内のレンマの論理との対照、そして生物学・進化論の近年の発展との関連についてはまた紙面を改めて考察する必要がある。

カンギレム（1904-1995）が示したように、*milieu* という概念の歴史は18世紀以降と比較的短く、また近代地理学の歴史も同様である⁸⁰。

「風土」によって切り拓かれた領域は、近年生態学や心理学、認知科学、現象学、東洋思想研究をはじめとする各研究分野で徐々に光が当てられてきているが、未だ多分に学問的死角にあるといえよう。ベルク風土学は理論的探究であるとともに、この風土に生きるものにとっての実践的課題をも明らかにする。人間存在と環境の課題に対する私たちの責任を、それは根源的に問いかけているのである。

謝辞

本稿は、修士学位論文の一部抜粋に加筆変更を行ったものである。資料のご提供を頂いたフランス国立社会科学高等研究院オギュスタン・ベルク教授、金沢大学中島弘二教授、執筆にあたりご助言をいただいた東京大学石田英敬教授、佐倉統教授、金森修教授、各研究室・UTCP各位、査読者各位に深く御礼を申し上げます。

註

- 1) 「風土論」と訳されることもあるが、本稿では「風土学」と統一する。
- 2) オギュスタン・ベルク、江口久美訳「La mésologie et le Japon 風土学と日本」『L'Echange』1, 1-2頁, 2011a, 1頁
- 3) Staszak, Jean-François, « Dans quel monde vivons-nous? Géographie, phénoménologie et ethnométhodologie, » Jean-François Staszak (dir.), *Les discours du géographe*, Paris: L'Harmattan, pp.13-38, 2000, p.24
- 4) Dardel, Eric, *L'Homme et la terre. Nature de la réalité géographique*, Paris: PUF, 1952
- 5) Claval, Paul, « La géographie culturelle et l'espace, » Jean-François Staszak (dir.), *Les discours du géographe*, Paris: L'Harmattan, pp.119-145, 2000, p.112
- 6) Dagognet, François (dir.), *Mort du paysage? Philosophie et esthétique du paysage. Actes du colloque de Lyon*, Seyssel: Champ Vallon, 1982; Pitte, Jean-Robert, *Histoire du paysage français t.1, t.2*, Paris: Tallandier, 1983; Cauquelin, Anne, *L'invention du paysage*, Paris: PUF, 1989; Quillet, Bernard., *Le paysage retrouvé*, Paris: Fayard, 1991; 他
- 7) オギュスタン・ベルク「日本風土の教え：蝦夷論から進化論へ」2011年度国際交流基金賞 日本研究・知的交流部門 受賞記念講演会 (http://www.jpfa.go.jp/j/about/award/11/dl/augustin_%20berque.pdf) , 2011b, 8頁 (参照2013/08/15)
- 8) Berque, Augustin, *Vivre l'espace au Japon*, Paris: PUF, 1982, p.23.本書は第一部が空間についての一般論、第二部が日本の空間の3つの組織化という視点から考察したものとなっているが、邦訳では第一部は省略されている。3つの組織化については、邦訳では「まえがき」において簡潔に述べられている (ただし「技術的」は「物理的」とされている) (オギュスタン・ベルク『空間の日本文化』宮原信訳、筑摩書房、1994、3頁)。
- 9) 和辻哲郎『風土』〔和辻哲郎全集第8巻〕岩波書店、1962b, 1頁
- 10) オギュスタン・ベルク「風土性の存在論的構造とその現代的意義」風土工学デザイン研究所監修『風土と地域づくり：風土を見つめる感性を育む』風土工学デザイン研究所、31-54頁、2003、33頁
- 11) 和辻、1962b、13-14頁
- 12) 同上、8-12頁
- 13) 同上、9頁
- 14) 和辻自身、日本語において哲学をすることに意識的であった (和辻哲郎『続日本精神史研究』〔和辻哲郎全集第4巻〕岩波書店、1962a)。
- 15) 日本語と印欧語における言語構造の違いについては、熊倉千之『日本語の深層：〈話者のイマ・ココ〉を生きることは』筑摩書房、2011に詳しい。ベルク自身も、和辻の評価に先立って1982年に同じく「寒さ」を例に言語構造間の違いについて指摘し、日本文化における「場所中心主義」を論じている (Berque, *op.cit.*, 1982, p.40 (ベルク、前掲書、1994、32頁))。
- 16) Berque, Augustin, *Médiance, de milieu en paysages*, Montpellier: Reclus, 1990, p.25 (オギュスタン・ベルク『風土としての地球』三宅京子訳、筑摩書房、1994、32頁)
- 17) ベルク、前掲書、2011a、1頁
- 18) Berque, Augustin, *Le sauvage et l'artifice. Les Japonais devant la nature*, Paris: Gallimard, 1986, p.134 (オギュスタン・ベルク『風土の日本：自然と文化の通感』篠田勝英訳、筑摩書房、1992、162頁)
- 19) ベルクはのちに、この単語が他の医者シャルル・ロバン (1821-1885) により、1848年6月7日の生物学協会の開会式の時点ですでに提案されていたことを発見する。「今日では、この単語が社会生態学の一種に関連していたとすることができます。その視点は実証主義的であり、社会と彼らの環境の解釈学的な存在論であった和辻のものとは大きな関係はありませんでした。」(ベルク、前掲著、2011a、1頁)
- 20) ベルクにとって、現在用いられていないこのmésologieという語は、エルンスト・ヘッケルが提唱した生態学écologieに局限化さ

- れた形で台頭された語であった。しかし、生態学の視点からはこぼれ落ちてしまう文化的要因も合わせることで初めて人間と環境との関係が理解されうるという考えがベルクにはあった (Berque, *op.cit.*, 1986, p.134 (ベルク, 前掲書, 1992, 162頁))。
- 21) 坂部恵『鏡の中の日本語』筑摩書房, 1989, 226頁; 木岡伸夫『風土の論理: 地理哲学への道』ミネルヴァ書房, 2011, 153頁
- 22) Baker, Alan R. H., *Geography and History: Bridging the Divide*. Cambridge: CUP, 2003, p.73
- 23) Berque, *op.cit.*, 1986, p.162 (ベルク, 前掲書, 1992, 205頁)
- 24) 和辻, 前掲書, 1962b, 240頁
- 25) 和辻哲郎『倫理学 下』[和辻哲郎全集第11巻] 岩波書店, 1962c, 147頁
- 26) Berque, Augustin, "Offspring of Watsuji's theory of milieu (Fūdo)," *GeoJournal*, 60, pp.389-396, 2004, p.390
- 27) Berque, *op.cit.*, 1986, p.162 (ベルク, 前掲書, 1992, 182-183頁)。後にベルクは、和辻の「風土性」とダルデルの「地理性」との比較研究の可能性を指摘している (オギュスタン・ベルク「《第84回 地理思想研究部会》風土性と持続可能性」『人文地理』58(4), 2006, 79頁)。
- 28) 例えば、和辻は地中海地方の樹木の形を見た際、「人工的という感じ」、「合理的であるという感じ」という自分が受けた印象を、そのままヨーロッパ人の在り方の分析に投影している (和辻, 前掲書, 1962b, 76-77頁)。
- 29) Berque, Augustin, *Écoumène. Introduction à l'étude des milieux humains*, Paris: Belin, 2000, p.126 (オギュスタン・ベルク『風土学序説: 文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に』中山元訳, 筑摩書房, 2002, 221頁)
- 30) 和辻, 前掲書, 1962b, 23頁
- 31) 同上, 124頁
- 32) 坂部恵『和辻哲郎』岩波書店, 1986, 118頁, 126頁
- 33) Berque, *op.cit.*, 1986, p.163 (ベルク, 前掲書, 1992, 205頁)
- 34) Berque, *op.cit.*, 1990, p.101 (ベルク, 前掲書, 1994, 116頁)
- 35) Berque, *op.cit.*, 2000, p.151 (ベルク, 前掲書, 2002, 266頁)
- 36) Gibson, James J., *The Ecological Approach to Visual Perception*, Hisdall, NJ: Lawrence Erlbaum, 1979, p.18 (ジェームズ・J・ギブソン『生態学的視覚論: ヒトの知覚世界を探る』古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻共訳, サイエンス社, 1986, 20頁)
- 37) *Ibid*, p.183 (同上, 198頁)
- 38) Berque, *op.cit.*, 2000, p.151 (ベルク, 前掲書, 2002, 266頁)
- 39) Berque, *op.cit.*, 1986, (ベルク, 前掲書, 1992, 176, 197頁); Berque, *op.cit.*, 1990, p.101 (ベルク, 前掲書, 1994, 116頁); オギュスタン・ベルク, 篠田勝英訳『地球の存在の哲学: 環境倫理を超えて』筑摩書房, 1996, 176頁; Berque, *op.cit.*, 2000, p.151 (ベルク, 前掲書, 2002, 266頁) 等
- 40) Berque, *op.cit.*, 1986, p.166 (ベルク, 前掲書, 1992, 212頁)
- 41) *Ibid*, p.48 (同上, 58-59頁)
- 42) *Ibid*, p.41 (同上, 50頁)
- 43) *Ibid*, p.41 (同上, 51頁)
- 44) 関三雄「風土と景観のあいだあるいは和辻=ベルク理論のアポリア: 新たな景観論の可能性を求めて」『山陽論叢』17, 62-78頁, 2010, 77頁
- 45) *Ibid*, p.41 (同上, 51頁)
- 46) Berque, *op.cit.*, 1986, p.151 (ベルク, 前掲書, 1992, 188頁)
- 47) Berque, *op.cit.*, 1986, p.157 (ベルク, 前掲書, 1992, 197頁)
- 48) Berque, *op.cit.*, 1986, p.228 (ベルク, 前掲書, 1992, 292頁)
- 49) Berque, *op.cit.*, 1990, p.111 (ベルク, 前掲書, 1994, 127頁)
- 50) Berque, *op.cit.*, 1990, p.12-13 (ベルク, 前掲書, 1994, 19頁)
- 51) Berque, *op.cit.*, 1990, p.13 (ベルク, 前掲書, 1994, 19頁)
- 52) ベルクは、エコロジー思想は倫理の基盤にあるはずの人間の主体性に特別なステイタスを認めることを拒否することで、倫理として成立しないものになっていると批判する (ベルク, 前掲書, 1996, 69頁)。
- 53) Berque, *op.cit.*, 1986, p.165 (ベルク, 前掲書, 1992, 209頁)

- 54) 筑摩書房への書き下ろし。同年バリ、ガリマール社から*Être humain sur la Terre*として出版される。
- 55) ベルク, 前掲書, 1996, 85頁
- 56) ベルク, 前掲書, 1996, 87頁
- 57) ベルク, 前掲書, 1996, 86頁
- 58) ベルク, 前掲書, 1996, 221頁。技術哲学者アンドリュウ・フィーンバークも着目した点である (Feenberg, Andrew, *Questioning Technology*, New York: Routledge, 1999, pp.164-165)。
- 59) ベルク, 前掲書, 2006, 80頁
- 60) Leroi-Gourhan, André, *Le geste et la parole.1. Technique et langage*, Paris: Albin Michel, 1964, p.166 (アンドレ・ルロワ=グーラン『身ぶりと言葉』, 荒木亨訳, 筑摩書房, 2012, 199頁)
- 61) 荒木訳では「社会的組織体」。Leroi-Gourhan, André, *Le geste et la parole.2. La mémoire et les rythmes*, Paris: Albin Michel, 1965, p.34 (同上, 375頁)
- 62) Leroi-Gourhan, *op.cit.*, 1964, p.197 (同上, 233頁)
- 63) ベルクによるルロワ=グーランへの言及は1999年頃から見られる (Berque, Augustin, « Géogrammes, pour une ontologie des faits géographiques, » *Espace géographique*, 28(4), pp.320-326, 1999, p. 324)。
- 64) Berque, *op.cit.*, 2000, p.126-127 (ベルク, 前掲書, 2002, 222頁)
- 65) *Ibid*, p.96 (同上, 170頁)
- 66) *Ibid*, p.98 (同上, 174頁) ここには、単純な構築主義の観点との差異化を図るベルクの動機があった。
- 67) *Ibid*, p.128 (同上, 224頁)
- 68) Berque, *op.cit.*, 2000, p.129 (ベルク, 前掲書, 2002, 226頁)。この内容は1999年8月に開かれた飛騨高山でのシンポジウムでも発表され、荒木亨はこのベルクの解釈を積極的に評価している (荒木亨「オギュスタン・ベルクと共に」『雑誌シグノ別冊』4, 1999, 87頁)。
- 69) *Ibid*, p.129 (同上, 226頁) この両者の違いについて、技術システム、象徴システムといった構造に着目したルロワ=グーランに対し、ベルクはその機能(人間存在との関係)に着目したと見ることもできるだろう。
- 70) Berque, *op.cit.*, 2000, p.129 (ベルク, 前掲書, 2002, 226頁)
- 71) Berque, *op.cit.*, 2000, p.107 (ベルク, 前掲書, 2002, 191頁)
- 72) 西訳では「外在化の逆説」。Stiegler, Bernard, *La technique et le temps.1. La faute d'Épiméthée*, Paris: Galilée, 1994, p.149 (ベルナル・スティグレール『技術と時間1: エピメテウスの過失』石田英敬監修, 西兼志訳, 法政大学出版局, 2009, 203頁)
- 73) *Ibid*, p.152 (同上, 208頁)
- 74) 和辻も「人間に対立する他方の項としての大地というごときものは、抽象的な曖昧な概念に過ぎぬのである。それと同様に土地や気候に対立する人、ルソーの考えたような孤立的利己的な自然人などというものも、全然非現実的な抽象物に過ぎない」とルソーの自然人の概念を批判している (和辻, 前掲書, 1962c, 153頁)。
- 75) Stiegler, *op.cit.*, p.152 (スティグレール, 前掲書, 208頁)。スティグレール自身はデリダの「差延」概念を用いてこのアポリアの解決を試みており、彼の哲学とベルク風土学との比較も有意義であると考えられる。
- 76) ベルク, 前掲書, 1996, 110頁
- 77) Berque, *op.cit.*, 2000, p.156 (ベルク, 前掲書, 2002, 274頁)
- 78) ポール・クラヴァル、ジョエル・ボンヌメゾン、ジャック・ベトゥモンらは、ベルクをフランス文化地理学の復興に関わったものとして評価している (Claval, *op.cit.*, p.127; Bonnemaison, Joel, *La géographie culturelle*, Paris: CTHS, 2000 (*Culture and Space: Conceiving a new cultural geography*, translated by Josée Pénot-Demetry, New York: I.B. Tauris, 2005); Daudel, Christian, *Jacques Bethemont. Géographe des fleuves*. Paris: L'Harmattan, 2010, p.139)。また、ダルデルの地理性概念、ベルクの風土性概念を用いた研究も試みられている (Dupont, Louis (dir.), *Géographicité et médiance. Vivre et habiter l'espace*, Paris: L'Harmattan, 2008)。
- 79) Berque, Augustin, *La Pensée Paysagère*, Paris: Archibooks + Sautereau éd., 2008 (オギュスタン・ベルク『風景という知: 近代のパラダイムを超えて』木岡伸夫訳, 世界思想社, 2011); オギュスタン・ベルク, 鞍田崇訳「風土とレンマの論理」立本成文編『人間科学としての地球環境学: 人とつながる自然・自然とつながる人』京都通信社, 2013, 89-118頁
- 80) Canguilhem, Georges, « Le vivant et son milieu, » *La connaissance de la vie*, Paris: Vrin, 1952, pp.165-197 (ジョルジュ・カンギレ

ム「生体とその環境」『生命の認識』杉山吉弘訳、法政大学出版局、2003、147-179項)

参考文献

- Baker, Alan R. H., *Geography and History: Bridging the Divide*, Cambridge: CUP, 2003
- Berque, Augustin, *Le Japon. Gestion de l'espace et changement social*, Paris: Flammarion, 1976
- Berque, Augustin, *La rizière et la banquise. Colonisation et changement culturel à Hokkaidô*, Paris: Publications orientalistes de France, 1980
- Berque, Augustin, *Vivre l'espace au Japon*, Paris: PUF, 1982 (オギュスタン・ベルク『空間の日本文化』宮原信訳、筑摩書房、1994[1985])
- Berque, Augustin, *Le sauvage et l'artifice. Les Japonais devant la nature*, Paris: Gallimard, 1986 (オギュスタン・ベルク『風土の日本：自然と文化の通感』篠田勝英訳、筑摩書房、1992[1988])
- Berque, Augustin, *Médiance, de milieux en paysages*, Montpellier: Reclus, 1990 (オギュスタン・ベルク『風土としての地球』三宅京子訳、筑摩書房、1994)
- Berque, Augustin, « Géogrammes, pour une ontologie des faits géographiques, » *Espace géographique*, 28(4), pp.320-326, 1999
- Berque, Augustin, *Écoumène. Introduction à l'étude des milieux humains*, Paris: Belin, 2000 (オギュスタン・ベルク『風土学序説：文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に』中山元訳、筑摩書房、2002)
- Berque, Augustin, "Offspring of Watsuji's theory of milieu (Fûdo)," *GeoJournal*, 60, pp.389-396, 2004
- Berque, Augustin, *La Pensée Paysagère*, Paris: Archibooks + Sautereau éd., 2008 (オギュスタン・ベルク『風景という知：近代のパラダイムを超えて』木岡伸夫訳、世界思想社、2011)
- Canguilhem, Georges, *La connaissance de la vie*, Paris: Vrin, 1952 (ジョルジュ・カンギレム『生命の認識』杉山吉弘訳、法政大学出版局、2003)
- Cauquelin, Anne. *L'invention du paysage*, Paris PUF, 1989
- Claval, Paul, « La géographie culturelle et l'espace, » Jean-François Staszak (dir.) *Les discours du géographe*, Paris: L'Harmattan, pp.119-145, 2000
- Dagognet, François (dir.), *Mort du paysage? Philosophie et esthétique du paysage. Actes du colloque de Lyon*, Seyssel: Champ Vallon, 1982
- Dardel, Eric, *L'homme et la terre. Nature de la réalité géographique*, Paris : PUF, 1952
- Dupont, Louis, (dir.), *Géographicit  et médiance. Vivre et habiter l'espace*, Paris: L'Harmattan, 2008
- Feenberg, Andrew, *Questioning Technology*, New York: Routledge, 1999
- Gibson, James J., *The Ecological Approach to Visual Perception*, Hisdall, NJ: Lawrence Erlbaum, 1979 (ジェームズ・J・ギブソン『生態学的視覚論：ヒトの知覚世界を探る』古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬晃共訳、サイエンス社、1986)
- Leroi-Gourhan, Andr , *Le geste et la parole t.1. Technique et langage*, Paris: Albin Michel, 1964 (アンドレ・ルロワ＝グーラン『身ぶりと言葉』, 荒木亨訳、筑摩書房、2012[新潮社、1973])
- Leroi-Gourhan, Andr , *Le geste et la parole t.2. La m moires et les rythmes*, Paris: Albin Michel, 1965 (アンドレ・ルロワ＝グーラン『身ぶりと言葉』, 荒木亨訳、筑摩書房、2012[新潮社、1973])
- Pitte, Jean-Robert, *Histoire du paysage fran ais t.1, t.2*, Paris: Tallandier, 1983
- Staszak, Jean-Fran ois, « Dans quel monde vivons-nous? G ographie, ph nom nologie et ethnom thodologie, » Jean-Fran ois Staszak (dir.) *Les discours du g ographe*, Paris: L'Harmattan, pp.13-38, 2000
- Stiegler, Bernard, *La technique et le temps t.1. La faute d' pim th e*, Paris: Galil e, 1994 (バルナール・スティグレール『技術と時間 1：エピメテウスの過失』石田英敬監修、西兼志訳、法政大学出版局、2009)
- Quillet, Bernard, *Le paysage retrouv *, Paris: Fayard, 1991
- オギュスタン・ベルク、篠田勝英訳『地球と存在の哲学：環境倫理を越えて』筑摩書房、1996
- オギュスタン・ベルク『風土性の存在論的構造とその現代的意義』風土工学デザイン研究所監修『風土と地域づくり：風土を見つめる感性を育む』風土工学デザイン研究所、31-54頁、2003

- オギュスタン・ベルク 「《第84回 地理思想研究部会》風土性と持続可能性」 『人文地理』 58(4), 79-81頁, 2006
- オギュスタン・ベルク, 江口久美訳 「La mésologie et le Japon 風土学と日本」 『L'Echange』 1, 1-2頁, 2011a
- オギュスタン・ベルク 「日本風土の教え：蝦夷論から進化論へ」 2011年度国際交流基金賞 日本研究・知的交流部門 受賞記念講演会
(http://www.jpff.go.jp/j/about/award/11/dl/augustin_%20berque.pdf), 2011b (参照2013/08/15)
- オギュスタン・ベルク, 鞍田崇訳 「風土とレンマの論理」 立本成文編 『人間科学としての地球環境学：人とつながる自然・自然とつながる人』 京都通信社, 89-118頁, 2013
- 荒木亨 「オギュスタン・ベルクと共に」 『雑誌シグノ別冊』 4, 1999
- 木岡伸夫 『風土の論理：地理哲学への道』 ミネルヴァ書房, 2011
- 熊倉千之 『日本語の深層：〈話者のイマ・ココ〉を生きることば』 筑摩書房, 2011
- 坂部恵 『和辻哲郎』 岩波書店, 1986
- 坂部恵 『鏡の中の日本語』 筑摩書房, 1989
- 関三雄 「風土と景観のあいだあるいは和辻＝ベルク理論のアポリア：新たな景観論の可能性を求めて」 『山陽論叢』 17, 62-78頁, 2010
- 和辻哲郎 『続日本精神史研究』 [和辻哲郎全集第4巻] 岩波書店, 1962a[1935]
- 和辻哲郎 『風土』 [和辻哲郎全集第8巻] 岩波書店, 1962b[1935]
- 和辻哲郎 『倫理学 下』 [和辻哲郎全集第11巻] 岩波書店, 1962c[1949]



犬塚 悠 (いぬつか・ゆう)

[生年月] 1987年6月生まれ
 [最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府修士課程修了
 [専攻領域] 風土学, 環境思想, メディア論
 [主たる著書・論文]
 ・修士学位論文「風土学の理論と実践：遺伝子組換え作物と社会の風景論」(2013年3月)
 ・「指揮者・大野和士氏インタビュー：内的必然性から響きあう音楽」(共著, 『東京大学大学院情報学環紀要：情報学研究調査研究編』 28, 2012年3月)
 [所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程
 [所属学会] International Association for Environmental Philosophy, 日本哲学会, 応用哲学会, 環境思想・教育研究会, 日本デジタル・ヒューマニティーズ学会

Formation and Structure of Augustin Berque's Mesology

Yu Inutsuka*

Abstract

While the works of the French geographer Augustin Berque on Japanese studies are widely well known, his theoretical framework called mesology (*mésologie*) has not been well examined. In order to reconstruct geography, Berque has created his mesology in search of methodologies in between positivistic approaches and hermeneutic approaches for the analysis of the relationships between human beings and their environment. To understand the structure and contribution of mesology, this research will examine the course of Berque's work.

In 1970s when Berque started his research career, French geography was under a transformation from natural science to social science; phenomenological geography has been established. Many scholars argued that "landscapes" cannot be reduced to a physical notion but also contains phenomenological components. In this context, Berque also sought new methodologies to overcome modern positivistic geography.

In 1986, influenced by the concept *fūdosei* of the Japanese philosopher Tetsurō Watsuji, Berque started to define his theory as mesology (translation of *fūdogaku*). Watsuji defined this concept as "the structural moment of human existence." Berque translated the Japanese term *fūdosei* into mediance (*médiance*) and developed a new corpus for the study of milieu (*fūdo*), the key concept in French geography tradition since Paul Vidal de la Blache.

As a geographer, however, Berque has criticized the subjectivity in Watsuji's actual analysis of the analogies between human communities and their environments. It fallen into a kind of geographical determinism which French geography does not accept. James J. Gibson's concept of *affordance* guided Berque in considering mediance not only in phenomena but also in physical reality by providing an ecological base. Guided by affordance, Berque has proposed the concept of trajectivity (*trajectivité*) to express the reality of human milieu between subject and object.

The next significant change happened when Berque reinterpreted ecumene (a geographical

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

Key Words : Mediance, Trajectivity, Environment, Ecumene, Landscape

term to describe “inhabited area of the world”) as “the earth as *fūdo*” in 1996. To grasp the characteristics of humanity in contrast to other animals, Berque first used the term ecosymbology (*écosymbologie*). This was elaborated by his interpretation of Andre Leroi-Gourhan’s anthropology to give the positivistic base for mediance. Leroi-Gourhan proposed the coupling of the animal body (*corps animal* which is individual) with a social body (*corps social* which is collective), constituted by technical and symbolic systems. Berque agreed with the externalization through technical systems but not through symbolic systems depicted by Luroi-Gurhan. Understanding Luroi-Gurhan’s arguments in Watsuji’s *fūdo* provides a new insight of environmental issues and media technologies.

The course of Berque’s works, starting from the hermeneutic approach in geography, has progressively articulated and expanded the knowledge of many disciplines. The framework he achieved, mesology, sheds a light on human milieu/ecumene which have been a blind spot for modern sciences. Mesological analysis of today’s globalizing world guides us to consider the condition of the earth as one’s own existential problem.